

京都大学	博士（地域研究）	氏 名	石田 友梨
論文題目	インドにおけるイスラーム改革思想とスーフィズム ーシャー・ワリーウッラーをめぐる学者ネットワークからの考察ー		
（論文内容の要旨） 本論文は、18 世紀におけるイスラーム改革思想を、スーフィズムに主たる焦点を当て、インドの思想家シャー・ワリーウッラー（Shāh Walī Allāh, 1114/1703-1176/1762）を事例に考察するものである。 シャー・ワリーウッラーはムガル朝下に生きたが、この時代ムガル朝は、各地で反乱が相次ぎ、徐々に衰退に向かいつつあった。そのような危機の時代にあり、イスラームによる統治を唱えたのがシャー・ワリーウッラーであった。シャー・ワリーウッラーの主著である『究極のアッラーの明証（<i>Hujja Allāh al-Bāligha</i>）』は、イスラーム諸学の最高学府であるエジプトのアズハル大学で教科書として採用されるなど、現代でも南アジアを中心に広く読み継がれている。また、シャー・ワリーウッラーは、クルアーンの原語であるアラビア語を母語としない南アジアにおいて、ムスリムがその内容を理解することができるように、当時の公用語であったペルシア語に翻訳した功績でも知られている。 一方、アラビア半島においてはムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブ（Muḥammad ibn ‘Abd al-Waḥhāb, 1115/1703-1206/1791）がイスラーム改革を進めていた。同じ時期にインドとアラビア半島で生まれたイスラーム改革思想について、従来ふたつの見方がされてきた。ひとつは、両者に関連がないとする立場であり、もうひとつはアラビア半島のイスラーム改革思想がインドへ伝わったとする立場である。 前者によれば、シャー・ワリーウッラーの改革思想はインドの先達アフマド・スィルヒンディー（Aḥmad Sirhindī, 971/1564-1034/1624）のそれを受け継ぐ、インド独自のものである。この立場からすれば、インドにおけるイスラーム改革は、ヒンドゥー教徒への対抗という意味合いを強くもつものということになる。 他方後者は、17-18 世紀のアラビア半島を中心とした学者のネットワークによって、イスラーム世界各地にイスラーム改革思想が伝わったとする。しかし、学者ネットワーク論の問題として、その中心地であったアラビア半島出身のムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブがスーフィズムを否定したことが、スーフィズムを重視するイスラーム改革の主流の思想と相容れないことの説明がつかないということが指摘できる。			

以上をふまえ、本論文はインドとアラビア半島の双方におけるシャー・ワリーウッラーの師弟関係に着目することで、インドにおけるローカルな知の伝達と、アラビア半島からのグローバルな知の伝達の交差したところに、シャー・ワリーウッラーのイスラーム改革思想を位置づけることを目指す。

本論文は4章からなる本文と序章・終章で構成されている。序論においては、学者ネットワークという観点からイスラーム改革思想を捉える先行研究を整理し、その問題点を指摘する。

第一章は、イスラーム世界各地への学者ネットワークの広がりを描写し、そのなかでのシャー・ワリーウッラーの位置づけを示す。第二章は、シャー・ワリーウッラーの家系を辿り、一族がインドに基盤を築いていく過程を追っている。その際に、家業となるマドラサの教育内容についても検討を行っている。第三章では、シャー・ワリーウッラーが傾倒したナクシュバンディー教団(スーフィズムに基づく教団のひとつ)の師弟関係を明らかにし、アフマド・スィルヒンディーとのつながりを示している。

これらを受けて第四章では、学者ネットワークの両翼とされるハディース学とスーフィズムに対するシャー・ワリーウッラーの見解について、原典に基づき明らかにしている。ハディース学については、クルアーンとスンナに基づくことを重視する姿勢が、学者ネットワークと一致していることを示す。スーフィズムについては、インドにおける師とアラビア半島における師の教えを紹介しながらも、最終的にはそのどれとも一致しない、シャー・ワリーウッラー独自の見解に達していることを示す。

結論では、シャー・ワリーウッラーが学者ネットワークの主流派とほぼ意見を同じくしながらも、インドの状況に合わせて柔軟に思想を展開させていたことを指摘する。たとえば、個人がクルアーンから直接答えを導き出すことを奨励しながらも、インドのムスリムにとってアラビア語が母語でないことに鑑み、クルアーンの翻訳を行ったことが挙げられる。また、スーフィズムの議論からは、シャー・ワリーウッラーが自ら生きる時代を悲観していなかった証拠を示す。これは、ヒンドゥー教徒に脅かされるインドのムスリムのためにイスラーム改革を唱えたとする従来のシャー・ワリーウッラー像に再考を迫るものである。シャー・ワリーウッラーの思想が、インドという局地からだけでなく、イスラーム共同体という大局からも検討すべきものであること、そしてアラビア半島からの影響のみによって成立したものでないことを、本論文は明らかにしている。